

# 220705 全国

## 実効再生産数

1/10	5.68
1/20	2.58
1/23	1.93
1/31	1.46
2/1	1.28
2/7	1.15
3/14	0.93
3/21	0.98
3/28	0.95
4/4	1.05
4/11	1.01
4/18	0.98
4/25	0.97
5/10	0.97
5/16	1.07
5/21	0.97
5/21	0.97
5/29	0.93
6/6	0.90
6/13	0.95
6/20	0.98
6/25	1.01
7/4	1.11



# 宮崎

## 実効再生産数

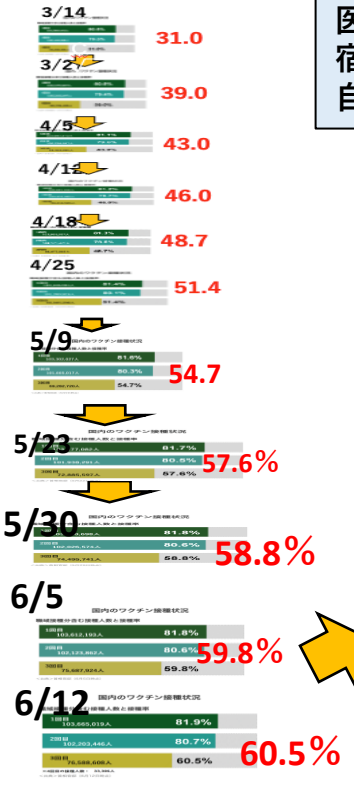
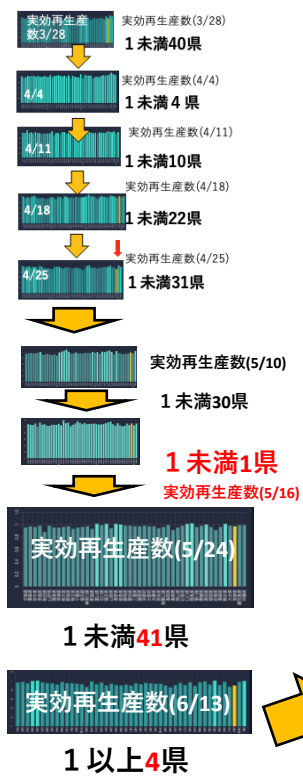
1/10	7.46
1/20	3.68
1/23	2.29
1/31	1.50
2/1	1.31
2/7	1.15
3/14	0.97
3/21	1.01
3/28	0.96
4/4	1.19
4/11	1.10
4/18	1.04
4/25	0.92
5/10	1.00
5/16	1.09
5/21	0.97
5/29	0.93
6/6	0.91
6/13	0.90
6/20	0.96
6/25	1.04
7/4	1.11



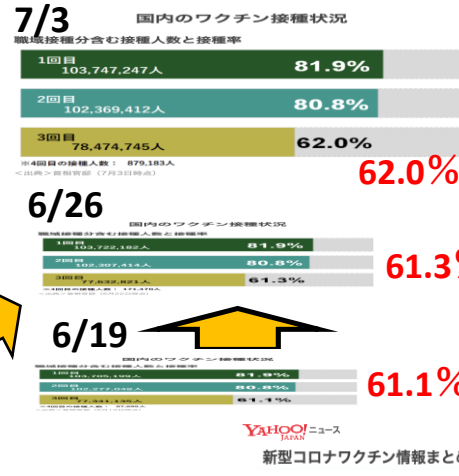
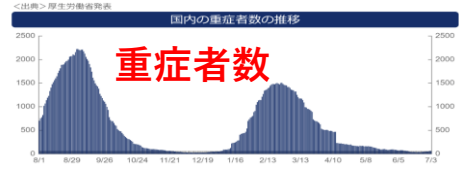
# 福岡

## 実効再生産数

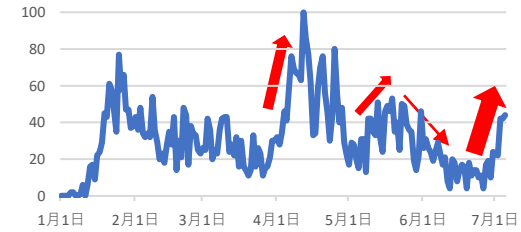
1/10	24.3
1/20	4.69
1/23	2.38
1/31	1.30
2/1	1.05
2/7	0.93
3/14	1.00
3/21	1.02
3/28	0.96
4/4	1.06
4/11	1.03
4/18	0.99
4/25	0.99
5/10	0.97
5/16	1.04
5/21	0.96
5/29	0.93
6/6	0.89
6/13	0.92
6/20	0.96
6/25	1.03
7/4	1.80



宮崎県DATA(7/4)  
 医療機関入院中**40名(延9)**  
 宿泊療養施設入所中**84名(延33)**  
 自宅等療養者**2004名**



## 延岡市の感染人数



飲酒を伴う会食での感染増加、家族内感染、高齢者施設、障害者施設、高校部活の感染増加している  
 ミニバレークラスター9名  
 高齢者施設クラスター1件(6名)  
 日之影国保クラスター(6名)  
 現在下げ止まり状態から増加傾向、これから増加傾向、7月中旬以降BA.5に置き換わりさらに増加し、8月のお盆休み前後にピークその後9月後半には減少する

延岡市の実効再生産数

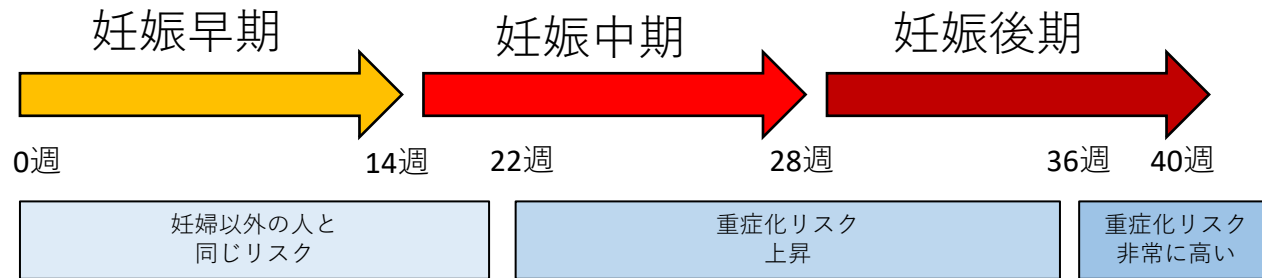
5/16	1.26
5/23	1.09
5/30	0.74
6/3	0.76
6/7	0.92
6/14	0.68
6/21	0.95
6/25	0.92
7/5	2.18

実効再生産数増加注意必要

by 佐藤圭創

# 妊婦の新型コロナウイルス感染対策

- オミクロン株の流行に伴い、乳幼児の感染者が急増するとともに、妊娠中のコロナ感染者が急増している。
- 特に、妊娠後期の新型コロナウイルス感染は、母子ともに重症化する確率が高いため、注意が必要である。
- 県北でも、オミクロン株の流行以降、新型コロナウイルス感染者数が増加し、妊娠後期患者において、帝王切開等の対応が必要な患者が急増している。
- 国内の研究で、妊婦がコロナに感染した場合、ほとんどが軽症で、中等症Ⅰ16%、中等症Ⅱ（酸素吸入が必要な症例）15%、重症1.9%であり、中等症Ⅱ～重症例では早産率が増加したと報告されている。また、妊娠糖尿病も増加している。
- 妊婦さんで、31歳以上、妊娠22週以降、妊娠前BMI 25以上、診断時BMI30以上、喘息などの呼吸器疾患があると、重症化しやすい。
- 特に、36週以降は重症化リスクが上がる。
- ステロイド、レムデシビル、中和抗体薬、抗IL-6レセプター抗体薬は、妊婦への有効性と安全性が確認されている。
- オミクロン株では、中等症Ⅱ～重症例の比率は減少している。
- 県北では、他の地域より早期に、県立延岡病院を中心に、「妊婦が感染した場合の医療対応システム」が構築されており、感染した場合の健康観察や診察などの対応がなされており、このシステムが十分に機能している。
- 妊娠する前から、新型コロナウイルスに感染しないようにする対応が重要。具体的には、妊娠を希望する場合は、1) 早急に必要なワクチン接種を受けておくこと、2) 感染を媒介する可能性のある家族は可能な限り感染しないような行動をとる（ご主人や子供さんの不注意から感染する機会が多い）、3) 職場などの社会環境からの感染を防ぐことも重要である。
- ステロイド、レムデシビル、中和抗体薬、抗IL-6レセプター抗体薬は、妊婦への有効性と安全性が確認されている。しかし、使用ができない薬剤も多い。
- 妊娠中は、胎児への影響で新型コロナウイルスに感染した場合に使用できる薬剤も制限されるため、ワクチンの接種が最も有効な手段である。
- 妊娠中、授乳中、妊娠計画中を通じて時期を問わずワクチンの接種種が推奨されている。（以前は、妊娠12週以上経過してからの接種を推奨していたが、現在は、安全性が確認され、全ての妊娠期間での接種が推奨されている）
- ワクチン接種を受けるために、妊娠のタイミングを調整する必要はない。
- 国内外の研究で、ワクチン接種による妊婦や新生児に対する有害事象に差がなかったと報告されている。
- 妊娠中のワクチン接種は、生成された抗体が臍帯を通じて胎児へ移行し、新生児を感染からも守ることが報告されている。また、新生児の入院リスクを減少させる。
- ワクチンそのものは、母乳中へは、移行しない。
- 出産後も新生児は感染による重症化リスクが高いため、感染を回避する行動が望まれる。
- 以上、妊娠を希望される方、妊婦さん含めて、ワクチン接種などの事前対応をしっかりとし、さらに周囲の人も妊婦さんに感染させないような行動をとることが重要である。家族内や職場などの感染機会を減らすことが重要である。
- 感染に対しては、早期対応が非常に重要で、感染の可能性がある場合（濃厚接触の場合を含めて）は、かかりつけの産婦人科医に相談することが重要である。



妊婦がコロナに感染した場合、ほとんどが軽症で、中等症I 16%、中等症II（酸素吸入が必要な症例）15%、重症1.9%

妊婦さんで、31歳以上、妊娠22週以降、妊娠前BMI 25以上、診断時BMI30以上、喘息などの呼吸器疾患があると、重症化しやすい

36週以降は、特に重症化リスクが上がる

### 妊産婦が感染しないためには

- 1) ワクチンを打つ
- 2) 3密を避ける
- 3) マスクつける、手洗いする、換気する

### 妊産婦が感染したら

- 1) かかりつけの産婦人科に連絡する
- 2) 保健所の指示に従う

ワクチン接種後の副反応と産科的症状

	1回目接種		2回目接種	
	n	%	n	%
<b>副反応</b>	<i>(n=5032)</i>		<i>(n=4587)</i>	
接種部位の疼痛	4873	96.84	4248	92.61
接種部位の腫脹	1511	30.03	1470	32.05
発熱	608	12.08	2554	55.68
倦怠感・疲労感	1504	29.89	3003	65.47
頭痛	711	14.13	1756	38.28
嘔気・嘔吐	191	3.80	506	11.03
下痢	103	2.05	137	2.99
腹痛	54	1.07	114	2.49
関節痛	220	4.37	1022	22.28
皮疹	51	1.01	47	1.02
咽頭痛	30	0.60	53	1.16
アナフィラキシー反応	1	0.02	4	0.09
その他	159	3.16	240	5.23
<b>産科的症状</b>	<i>(n=5393)</i>		<i>(n=4834)</i>	
お腹の張り	89	1.65	144	2.98
出血	46	0.85	38	0.79
子宮の痛み	23	0.43	51	1.06
胎動減少	23	0.43	25	0.52
浮腫	17	0.32	19	0.39
血圧上昇	5	0.09	7	0.14
破水	1	0.02	2	0.04
その他	98	1.82	108	2.23

ワクチン接種による妊婦に対する有害事象に差がなく、安全性が確認された。

妊婦の新型コロナウイルスワクチン接種に関する

WEB アンケート調査

厚生労働行政推進調査事業費補助金「新型コロナウイルス感染症流行下における妊婦に対する適切な支援提供体制構築のための研究（山田班）」  
日本産科婦人科学会周産期委員会 周産期における感染に関する小委員会